56 雀宮宿～宇都宮宿

栃木県宇都宮市

台新田 ～ 西 原

（ 歩行距離 1750m 22分 ）

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp

城

coffee time

城とは、土偏に成の字をあわせたことが示すように、土を盛りあげた土塁、砦のことである。「城」は「柵」と同様に「き」と読まれる。古代の城は、まさしく防御の機能をもつ城柵であり、まずは集落を外敵から守るためにきずかれた。律令国家の時代には西日本に朝鮮式山城、東北には城柵が設けられ、中央の支配下にあった。
中世の城は、地方に力を伸ばす武士たちの拠点で会った。彼らは各地に居館をかまえ、緊急事態にそなえて山城をきずいていた。
激しい戦国争乱の中で、城は山城から平山城、そして平城へと発達し、安土城を先駆とする近世的天守が本丸にそびえるようになる。天守は軍事目的の望楼から、領主の権威を象徴するものとして成立し、城は戦闘的目的の防衛施設だけでなく政治目的の領主の領国支配拠点ともなった。幕藩体制が確立すると、太平の世が到来し、江戸幕府の規制により、一国一城制となって多くの城郭が破壊された。城郭建築という点からみれば、以後の城は前代の継続・維持にとどまった。

川田入口交差点

17　宇都宮宿

宇都宮宿は、江戸から17番目の宿場。城下町で二荒神社の門前町。幕末期の日光・奥州・甲州道中宿村大概帳では、町並みの長さが南北20町（約2.2km）東西18町58間（約2.1km）、宿内惣家数家が1219軒（本陣2軒、脇本陣1軒、問屋場1軒、旅籠42軒）、宿内人別6457人（オトコ3302人、女3154人）、駄賃・賃銭　荷物一駄・乗掛荷人共142文、軽尻馬1疋92文、人村1人1文でした。

「当町は日光道中第一の繁昌の地にして、町四十八丁、通りぬけ四十丁ヨ」（五海道中細見独案内）とあり、明治に入ってからも「宇都宮町　東京市を距（へだた）ること二十八里余（河内）郡の中央に位置し、奥州街道及び諸街道の要路に当り、実に下野国第一の都会なり」（日本名勝地誌）と記された交通の要所であった。

地名の起こりは「地名の起り、開発の年代は詳ならざれ共、土人の伝には人王十代崇神天皇第一の皇子豊城入彦命を東国の総管となし下し玉ふに、国民豊に治り、此処に宮居し玉ふゆゑ民おのつから宇津くしき宮と称し、仰ぎ尊みけるをいつの頃よりか中略して宇都宮と唱へ改め庄名とし、宇都宮庄、或は蓬莱の庄と唱来れりといふ」（日光道中略記）

日光街道最大の宿場として栄えた。栃木街道、鹿沼街道、茂原街道、水戸街道、真岡街道などの始点でもあり、将軍はじめ諸侯の日光参詣の宿泊地でもあった。「宇都宮城の釣天井」伝説で有名な本多正純が江戸時代の初め頃に宇都宮城主となり、街道や城下町の整備、宇都宮場の大改造を行って、現在の宇都宮市街地の基礎を造りました。

平元通り交差点

①東武鉄道江曽島駅
開駅当時の横川村では、江曽島・上横田・川田などの集落があり、その中で江曽島が駅に近く人口も一番多かったところから、そのまま命名された。駅の東側は集落が多かったが、西側には松の大木が生い繁り昼でも薄暗く寂しい所で、民家が1軒もなかった。

江曽島一里塚跡

一里踏切

26 江曽島一里塚

日本橋から26番目の一里塚。右の塚には杉、左の塚には檜が植えられていた。一里交差点北、「カーチス宇都宮」の手前に「BIGMARCH」と「COCO壱番館」の大きくて派手な看板がある。その下に明治43年（1910）に建てられた「労農篠崎君功績碑」があったが、看板の設置とともに撤去された。そこが「一里塚」といわれ、看板よりもっと右、JR線路上にあったが、JR宇都宮線の開通により、塚は完全に消滅していて痕跡がない。

火の見櫓

coffee time

火の見櫓（ひのみやぐら）は、火災の早期発見、消防団の招集、町内への警鐘の発信などに使われていた見張台である。
木造建築が中心の日本では、ひとたび火災が起きると大災害につながる危険性が高く、火災予防と早期鎮火は主要課題であった。特に治安の安定により人口増加が進み建築物が密集するようになった江戸時代以降の市街地では、町火消（後に消防団）など消防体制の整備が急がれ、これに伴い火の見櫓が各地に造られていった。
江戸時代の消防体制は、大きな町ならば単独で、小さな町ならば近隣で組合を設けて結成された町火消を中心に運営されていたが、この町ごとに番屋（番所、自身番とも）を設置し、番人（番太郎・番太と呼ばれていた）を常駐させて24時間態勢で警戒にあたるのが一般的であった。このとき番人が町全体を見渡せるよう、番屋に櫓を組んで一段高いところに見張台を置いたが、それが火の見櫓と呼ばれる。
火の見櫓には一般に、その上部に半鐘が設けられた。これにより町内の火災を発見した番人がすぐに警鐘を鳴らし、火消を招集するとともに町人に火災の発生を知らせる役割を担う即応態勢が取られた。また、町によってはこの半鐘を時報や各種情報発信に用いている場合もあり、町ごとに鐘の鳴らし方が決められ、その長さや間隔によって様々な情報発信に使われていた。
火の見櫓は江戸時代の江戸を皮切りに、火消体制とともに整備されてゆき、昭和初期には全国ほぼ全ての地域に整備されていった。

上三川街道

coffee time

栃木県では上三川街道とも呼ばれているが、栃木県道・茨城県道35号宇都宮結城線が正式名称。
栃木県宇都宮市から茨城県結城市に至る県道で、国道4号とほぼ並行しており、結城市市街地と宇都宮市を結ぶが、茨城県区間の距離は1キロもない。